

「この国に生まれて」

学校法人東福岡学園東福岡自彊館中学校 3年 清武 琳

ここにうまれてよかった。初めてそう感じたのは、小学二年生の時だった。翌朝に手術を控え、病棟のベッドで恐怖に震え泣いていた僕はふと、学校の青少年赤十字加盟式で聞いた話を思い出した。世界には飢餓に苦しみ、教育や医療も満足に受けられない子どもたちが大勢いる、そんな内容だった。だからといって涙が止まるわけではなかったが、漠然と、もし外国に生まれて手術を受けられなかったら、もっと大変なことになるだろう、と思うと、少しだけ気持ちが前向きになった。

僕は先天性の脊柱側弯症と肋骨欠損で、五歳のときから今までに十八回手術を受けた。手術は怖いし、術後数日は激しい痛みとの闘いだ。でも、手術のおかげで、S字に曲がっていた僕の背骨は、服の上からならあまり目立たないくらいに矯正された。僕が受けている手術法の一つは僕が生まれる一カ月前に認可されたばかりで、もし数年早く生まれていたら、海外でしか受けられない手術だった。幸運が重なり、僕は通院している病院で、全ての治療を受けることができた。とはいえ、毎回全身麻酔で数時間の手術と一週間程度の入院。一回目の手術の後には、数日間集中治療室にも入った。今までにかかった医療費の総額が三千万円を超えている。しかも、手術は今後も続く。もしも全額負担となればとても払える金額ではない。

けれどありがたいことに、僕は「自立支援医療（育成医療）」という制度を利用できるため、自己負担はわずかな額ですむ。そのおかげで、支払いの心配をせずに最適な治療を受けられるのだ。小学二年生の僕は、ただなんとなく、手術は嫌だけど、手術ができないと困るんだろうな、と思っていた。でも今ははっきりとわかる。事故や病気で高額な医療が必要になっても安心して治療を受けられるのは、保険制度や医療制度があるからだ。そしてそれは、世界的には決して当たり前のことではないのだ。いつ誰が病気になるかはわからない。突然自分や家族が病気になったら、できる限りの治療を、と願うだろう。誰でも病院に行ける、治療を受けられる、というのは実はとても幸せなことなのだと思う。

こんな体で生まれてよかったと思ったことなど一度もない。でもこんな体で生まれたから、できた経験がある。出会った人がいる。みんなに支えられ、受け入れてもらえるおかげで、毎日の学校生活を楽しむことができている。「自立支援」のために高額な税金を使って、最高の治療を受けさせてもらっている。

あと数年で最後の手術を終える。体の成長が止まったら手術も卒業だ。経済的にも精神的にも自立した大人になることが、僕にできる社会への恩返しなのだと思う。これまで僕を支えてくれた全ての人への感謝の気持ちをこめて、今、大きな声で言える。

「この国に生まれてよかった。」

と。